年に出來たり、此小石川などの築地の土抔は、今の水道の北のかた、地たかき所の土にて築かれしに、大八といふもの、其土を運ぶ車を造出してければ、大八車とて、今も用ゆる事なり、

〔江戸名所記五〕芝　泉學寺

このごろ（寛文頃）は、地車といふ物をはじめて、牛をかけず、車に荷物をのせて、人八人してこれをひく江戸中、我も〳〵とこしらへて、その車の名を代八と名づけて用ゆ、牛にかはりて八人してひく故也、馬にのせてはこぶ物をもおほくはこの代八にてひかすれば、江戸中の馬借馬子等は、地車をいやがりにくみて、代八をひくものを、人畜生とのゝしるとかや、

牛ならで人ぞひかする地車を代八葉とこれもいふらん

〔本朝世事談綺二器用〕大八車

寛文年中、江戸にてこれを造る、人八人の代をするといふを以、代八と名付、今大八と書、その頃御殿中にて、人をして馬のごとくならしむと、戯の御沙汰ありし也、

〔嬉遊笑覽二器用下〕江戸には、牛に懸るも人の挽も、みな大八車を用（略中）誰身の上、三一日に錢を一貫文づゝもち出て、百人にあたへ、我とすまひをとるならば、必まけよとやくそくしてとりぬる間、大八町の男をも、かたてにてとりてなげ、六尺二分の法師をも、指一つにてつきたをしける、今按るに、大八町とは、大津の八町をいふなるべし、大津は、古より雜車のある所なれば、大八車の名は、これに起れりと思はる、（車に大八葉と云あり、古圖をみるに、車の紋に青蓮花の八葉を畫けり、其名を襲ひて、大八と呼りとするもいかゞ、）

〔撰要集〕乍恐以書付奉申上候

一大八車之儀者、明暦三酉年中、江戸大火ニ而、所々普請多ク候ニ付、木挽町邊ニ住居仕候牛車大工之者、始而大八車造リ出シ、夫より追々流行仕、只今ニ而者、京大坂、其外國々御大名方御城下等ニ而も、相用候由ニ御座候、